

## 大槻玄沢と『環海異聞』のはなし

### 江戸時代にロシアを紹介した書物

奥 正敬

#### ■はじめに

漂流民<sup>だいきやくやこうだゆう</sup>大黒屋光太夫たちを伴ったロシア使節アダム・ラクスマンの来航から12年を経た文化元(1804)年、同じくロシアからニコライ・レザノフという人物が使節として長崎へ来訪しました。彼の使命はラクスマンができなかった通商関係の樹立を求めるもので、前回と同様にロシアに滞在していた日本人漂流民を帯同していました。

結果的に徳川幕府との貿易交渉はもの別れに終わりますが、ロシア側は4人の漂流民を日本側へ引き渡しました。幕府は彼らを嘗て船出した釜石のある仙台藩へ戻し、同藩は江戸屋敷で取り調べを行います。

この時に質問と紀聞を命じられたのが蘭学者の大槻玄沢<sup>おおつきげんたく</sup>と儒学者の志村弘強<sup>しむらひろゆき</sup>で、彼らはその結果を『環海異聞』という書物に著わしました。ここでは、同書の編纂において主導的な役割を果たした大槻の業績と同書の成立についてご紹介いたします。

#### ■大槻玄沢とは

大槻玄沢(宝暦七[1757]年-文政十[1827]年)は陸中(岩手県)にあった仙台藩支藩の一関藩藩医<sup>おおつきげんりょう</sup>である大槻玄梁の子に生まれました。名を<sup>しげかた</sup>茂質<sup>ばんすい</sup>や<sup>しげかた</sup>磐水と号し、安永七(1778)年、江戸で<sup>すぎた</sup>杉田玄白<sup>げんぱく</sup>の門下に入ってオランダ医学を、翌年には<sup>まえのりょうたく</sup>前野良沢のもとでオランダ語を学んでいます。こうして、2人の恩師から一字ずつを貰ったことが名前「玄沢」の由来であるといわれています。

彼は天明五(1785)年から翌天明六(1786)年にかけて長崎へ遊学し、本木良永<sup>もときよしなが</sup>やその子正栄<sup>まさ</sup>、吉雄<sup>よしお</sup>耕牛<sup>こうぎゆう</sup>、志筑忠雄<sup>しづきただお</sup>、植林九暉<sup>ならぼやしきゆうこう</sup>らオランダとの交渉の第一線で活躍する通詞を訪ねて多くの知識を蓄積しました。同年、この成果を携え本藩である仙台藩へ移って江戸詰め<sup>江戸詰め</sup>の藩医となります。この頃から書物を記しながら西洋に関する知見を広め、『環海異聞』の編集に着手する頃には江戸時代後期における有数の西洋通になっていたようです。

その後も大槻は文化八(1811)年から幕府の天文台に勤務し、蘭書の翻訳部門で更なる業績を挙げています。その結果、彼が生涯に著わした書物や翻訳書は幅広く、印行されたもの15部45巻、その他の草稿を含めて121部198巻、合わせて243巻<sup>(1)</sup>にもものぼるといわれています。

#### ■大槻による『環海異聞』成立までの書物

中でも、文化四(1807)年の『環海異聞』の成稿直後までの著作の一例として、蘭学入門書の『蘭学階梯』<sup>らんがくかいてい</sup>(天明八[1788]年)をはじめ、本草学や博物学の分野の研究書である『六物新志』<sup>ろくぶつしん</sup>(寛政七[1795]年)、門弟との間で交わした西洋の薬物や動物、植物、産物、文物、風俗などについての質疑応答の内容を綴った『蘭説辨惑』<sup>らんせつべんわく</sup>(磐水夜話)』(寛政十一[1799]年)、煙草の歴史や栽培法、解毒、喫煙用具などを研究した『<sup>えんろく</sup>鴉録』(文化六[1809]年)など、自然科学の専門分野のものが多くあります。<sup>(2)</sup>

また、日本近海でのイギリス船の出没もとに、同国を警戒する必要性を論じた